

紹 興 ま で

指 田 か ほ る

銭塘大橋を渡ると左右に開けたのは、中国に来て初めて目にする豊かな農村風景だった。長沙、韶山など、湖南地方の、あの荒々しい赤い大地の上に、人間と自然との闘いそのものという姿であった農村を見て来た目には、ここ浙江省の豊かな土壌や整った耕地の様子は驚くほど美しく見えた。農業に関してはまるで無知な素人目にも、これほど広くかつ整頓された農地であれば、ここに最新の機械を導入すればただちに、飛躍的な生産の向上が望めるだろうと思われた。

それにしても、土の本来の肥沃さという点では、日本の方がはるかに優れているのではないだろうか。季節のせいもあるかもしれないが、中国の土はまっ赤か灰色で、がりがりしていて、にぎりしめればそのままレンガになるような土である。きびしい自然の中で中国の農業が発展し、恵まれた条件の日本では農業が崩壊寸前という。これはいったいどういうことなのか。中国であれこれ見るにつけ聞くにつけ、心に浮かぶのは日本の事である。

紹興周辺は今まで外国人旅行者の目にふれることが少なく、その意味では処女地ともいえる土地だという。そのせいか、ものの三十分と行かないうちに濃い霧がおりてきて、あっという間に我々の目から自分の姿をおおい隠してしまった。相手が霧では、邪魔をするなと文句も言えない。海が近いし、川や池の多い所なので、午前中はよく霧が発生するそう。霧の中で、畑のうねを作っている人の姿がかすかに見える。

この道は立派である。舗装はされていないが、広くて、両側には街路樹が二重に植えてある。公路緑化区域という看板があった。しかし、中国で

濃霧の中、車を走らすのは相当勇気のいることである。反対側から、片目や一つ目のトラックがふっとんで来る恐れがあるからだ。中国の交通規則は日本よりかなりルーズである。だが、車のヘッドライトだけは二つにしてほしいものだ。一つでは位置の感覚がつかめず危険である。日本のダンプのあのバカバカしいイルミネーションも、あれで案外、役立っているのかもしれない。

紹興市内に入るまでに、大部手間取ってしまった。我々のバスも、この作文も。だが、私がここで贅筆を弄しているのには理由がある。私は紹興の町の印象を一言で述べたいのである。我々の訪中団の犯したあやまちに対する反省をこめて。また、僭越を承知で言えば、我々に限らず、日本人で中国のことを勉強していますという人々が多く持っているような、ある欠点に対する、日本人としての自己批判をしたいのである。その準備が整うまで、市内に入るわけにはいかないのも、もう少し徐行運転をさせてほしいと思う。

杭州から紹興に至る道すじで気づいたことがもう一つある。それはスローガンがほとんど見当たらないことである。長沙あたりでは家の壁といわず柱といわず、塀にも、道路の肩にも、はては田畑の中まで石灰か何かで、皆さんご存じの“農業学大寨”とかいろいろ大書してあったのに、これはどういう現象だろう。私は二つ仮説を立ててみた。一つはあまりに不遜な考えなので言えない。“アフリカの爆弾”がヒントである。もう一つは、言語心理学的、と自分では思っている考察である。つまり、スローガンを書くということは、書く必要があるから書くのだ。“農業学大寨”とあれば、そこは大寨に学ばねばならぬ現状であることを示すし、“千万不要忘階級闘争”とあれば、うっか

りすると忘れるかもしれないという現実が背景にあるのだ。スローガンの大書が、政治意識の高さを示しているとは考えられない。むしろ、政治意識を高めようとする意識のあらわれととらえるのが妥当だと思う。だから、スローガンが少ないということは、書く必要が乏しい、つまり、すべてがかなりうまくいっている事の表われではないか、これが私の仮説である。

杭州から約二時間、紹興市内に入った。白漆喰と黒い屋根の家並。家々の裏手には必ず水が流れていて、石段でおりられる。水はあまりきれいではないが、洗たくや野菜洗いに使っている。何と呼ぶのか、その水上に行く平べったい小舟。舟が通れるように石を積み重ねてアーチ型にした橋。白っぽい肌の街路樹。閩土や范愛農がかぶったという、黒いフェルト帽のおじいさん。霧はすっかり晴れた。紹興は、まぶしい、どことなく寂しい、つつましい町である。つまり古い町である。およそ百年前、魯迅が生まれた時と今と、この町の風景は基本的には変わっていないのではないかと思われる。いちばん中国らしい町に来ましたねえ、と団員の一人が言ったので、本当に、と相づちを打ったが、これは無責任な感想である。私は中国を見るのは初めてだし、その先生だって、そんなにくわしい訳ではない。らしいか、らしくないかは、わかるはずがない。だが、とにかくここは魯迅のふるさとだ。我々はずいぶんやって来たのだ。紹興まで。

ふるさと、ということに考え及んだ時、私は突然ぎくっとした。あらためて、うつむき加減の街路樹と無口な町を見回すと、一つの言葉が脳裡にひらめいた。それがさっき書いた、一言で述べる紹興の印象である。

ふるさとは、語ることなし。

これだけでは何の事かわからないだろう。だがきわめて象徴的なでき事がここで起きた。

今回の訪中団は、いちおう魯迅研究が軸という

ことであったので、上海へ着くとさっそく魯迅記念館を参観し、あれこれ質問できる座談会が設けられた。そこで有意義な話し合いが行なわれたわけだが、場所がら、時節がら、話題は魯迅そっちのけで、姚文元、張春橋、石一歌等の、四人組の問題に集中してしまった。彼らがどう魯迅を歪曲したか、それは重大な問題に違いない。だが、魯迅中心の視点からは、決して本質的な問題ではないのだ。偉大な文学者・革命家であっても、時とともにその評価が変わっていくのは当然の事だ。問題はその評価のしかたが正しいか正しくないかだけだ。四人組の魯迅評価は、根本的に間違っていた。それだけのことだ。価値は常に評価より大きい。魯迅を歪曲して傷つくのは、歪曲した人間の方だ。第一、四人組如きに歪曲される魯迅だとは思われぬ。しかし、そんなわけで、魯迅の旅の焦点は完全に魯迅をはずれた。その時点で我々は、すでに紹興を訪れる目的を見失ったのである。だがそのことに、紹興に着くまで気がつかなかった。

もっと大らかに、多方面から話をすればよかったのだろう。初歩的な作品論をたたかわすとか、記念館の参観者数は一日平均どのくらいですかとか、予算はいくらとか、館主催の行事はあるとか、そんな他愛もない話からの方が、得るものは大きかっただろう。

だが上海ではまだよかった。場所がらもあって四人組の話も面白かった。しかし、上海で残した問題を紹興に持ちこむ羽目になった。中国側の要求もあったが、紹興での座談会に向けて二十カ条に余る質問を事前に送った。大半は紹興と関係のない、極端に言えば魯迅とも関係の薄い内容だった。結局、その回答は拒絶された。ふるさとは、そういうことを語る所ではなかった。拒絶は当然だった。石一歌について、魯迅のふるさとに口を割らせようとしても、それはそもそも無理な話だ。だが、拒絶されたのはあながち、質問の内容ばかり

りではあるまい。より強く拒絶されたのは我々のトリヴィアリズムではなかったか。

紹興の鲁迅記念館の態度は立派だった。この中心は鲁迅十七才までと、二年間の教員時代だと明言して、それ以外には踏みこまない。それは我々と正反対の、すばらしく謙虚な姿勢に見えた。

“故郷”の閩土のモデルといわれる章閩水さんの孫の章貴さんが、代表でいろいろ話してくれたが、その話も素朴で興味深かった。

ふるさとは風景だけでよい。何も語らなくても、そこで生まれ育った人の心がわかる。人はなぜ、ふるさとに特別の意味を与えるのだろうか。それは、誰にとってもふるさとは、一切の功利主義と無縁な、あこがれと愛の対象だからである。たとえ裏切られても。我々がはるばる鲁迅の故郷をたずねたのも、そのためだ。鲁迅に対する深い敬愛の気持と、鲁迅から少しでも大きいものを学びとりたいという熱意が、我々を紹興まで誘い出したのではなかったか。その気持がなければ、紹興に来る必要はないのだ。もちろん、例えば紹興酒の酒がめの中で溺れたいという目的なら話は別だが、四人組のことを聞きたかったら、上海にいつづけるのが一番いいわけだ。

反省するのは以上のことである。文学などに大して価値はないが、文学が教えるのは人の心だ。心を失った鲁迅の旅になってしまったような気がしてならない。

次に日本人としての自己批判だが、中国の諸問題に対応する時の主体性の問題である。自分の価値観に自信を持たなければいけない。中国がいいと言ったからいい、批判したから悪いということでは、日本人の誇りはどこにあるか。石一歌の著作の翻訳を手がけながら、批判されたからといって出版をあきらめるなど、よく考えればこんなのだらしのない話はない。これは特定の個人や団体のことではない。これに類することはいくらかもあるだろう。自分でも日々、ささやかながらこの

種のあやまちを繰り返していると思っている。

明治以来、日本文化は欧米志向の権威主義によって損なわれて来た。やっとそれを脱却しつつある現在、今度ここで中国志向の権威主義にとりつかれたら、日本文化は二度と立ち直れないだろう。それが恐ろしい。

紹興の印象記のつもりが、ロクでもない文章になってしまった。紹興には他に、鲁迅の生家と三味書屋という塾、鲁迅が教鞭をとった中学校、それに辛亥革命のときに殺された秋瑾の故居がある。ともに一見の価値があるとだけ書いておこう。それに紹興酒の工場も、酒好きの人にはかっこうの見学場所であろう。なにしろ工場に入る前から、そこはかたなく酒の香りがただよってくるのだから。紹興県のお茶の人民公社もすばらしかった。山を切り拓いた段々畑の茶畑はみごとというほかない。紹興の接待所は、解放前の地主の家だったとかで、豪奢である。紫檀の家具など生まれて初めて見たようだ。夜には紹興の地方劇である紹劇団の人が来てくれた。紹劇は大空の下でやる土着のオペラだと思えばいいだろう。力強い歌声に心を打たれる。

二日目の朝も紹興は霧に包まれていた。町では年糕を売っていた。鲁迅の故郷を確認してから、私のなかでしきりに帰心の陰がゆれるようになった。墓こそないが、ここは鲁迅の塋域だ。だが人は、自分の“墳”である場所で生きねばならぬ。帰んなんいぞ！ 日本のが心配だ。

『披黒雲睹青天』

——浅川謙次追悼遺稿集

A 5 版 352頁 上製箱入 2500 円
(申込み) 浅川謙次追悼遺稿集刊行委員会
東京都千代田区九段北4-1-34
中研内、郵便振替・東京0-33862